

今年の大河ドラマは篤姫。西郷を生んだ幕末の薩摩は我が国の奇跡のような存在。そこには偶然ではない、当時の国学・儒教に裏打ちされた勉強家達と彼らを支えた秩序ある家族や社会があった。信念や国を思う人々の明日に向かうエネルギーが満ち溢れ、夢実現に若者たちが爆発した明治維新。列強の圧力をひしひしと感じながら、過たず成功裏に導いた多くの志士。中でも西郷と大久保の薩州コンビは、内外の情勢を読み幕末維新を大回転させた功績は偉大だ。

幕府と薩摩藩の攻防や藩主の逆鱗に触れたことなどで、西郷は生涯二度配流の身となった。最初は奄美大島、2度目は文久2年の沖永良部島。正に、辺境の地・龍場にて悟りを開いた文武両道の王陽明を想起する。逆境をプラスにし、苦節の中で精神を鍛え磨き上げカムバックした男の魅力は今も国民的人気を持つ。

西郷は詩に詠んだ「**幾たびか辛酸を経て志始めて堅し**」西郷の座右の銘となった**敬天愛人**も、2度目の流刑の時期に培われたものとされている。

幕末維新の大立者、坂本龍馬や勝海舟、明治の内村鑑三、福沢諭吉、夏目漱石など文人から実業界の綺羅星が惚れ込んだ男。何と、**陽明学**の本場の蒋介石は、西郷に関する本を130冊も持ち愛読していたという。「**至誠**」を口にし、何事もないように対処する。そこが大久保、木戸や岩倉などの生き様と異なり、信念をもって、陽明学を奉じ行動で示し続けた西郷の大きさがある。

維新なつての征韓論の政争は多くの謎があるが、洋行帰りの大久保らが起死回生を図っての政変に相違ない。奇しくも2人は道半ばで倒れたが、以後の声望と評価は天と地。天は見ているのだろう

西郷も大久保も陽明学を学んだが、最後まで至誠をもって実践したかどうかで、晩節が分かれた。革命までは同志の意気は生き生き。事成ると、内なる欲望・野望と権力志向が出てくる。世界中の革命家の辿った道はみな同じ。それを肅清と呼んでいるようだ。

悲しいかな「昨日の友は今日の敵」。革命家が阿修羅になってゆく。

歴史の正しい評価は死んだ後に現れる。